



# いっしょに歩こう！ プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援

News Letter

第14号

2012年10月1日発行

## 》》二度目の夏がやって来ました

大震災から1年半が経ちました。しかしながら、被災者たちの生活が大きく好転することはありません。子どもたちも、日々厳しい環境の中で生活しています。それでも、夏休みを迎えた子どもたちは元気いっぱい、子どもたちのためだけに企画された「夏休み子どもプログラム」を楽しみました。

また、夏休みを利用して、聖公会関連の学校や教会からたくさんの来訪者がありました。

ともすると、被災地やそこに生きる人たちに関する情報が少なくなる中、被災各地で人々と交流して頂くことは、被災者だけでなく、支援をする者にとっても大きな励ましになります。来訪した方々にとっても、被災地を目の当たりにし、被災者と交流することによって、多くの経験と学びが与えられているように思います。



宿題の絵日記にも  
キャンプのことが  
登場しました！

## 夏休み 子どもプログラム

子どもたちの笑顔のため！  
長崎、新潟、岩手で開催

大学生ボランティアの声  
神戸松蔭女子学院大学  
名古屋柳城短期大学



夏休み  
子どもプログラム①

## 南の島で夏休み

7月26日-28日

長崎県長崎市  
高島

福島県福島市

海水が  
からい!



### 『長崎県高島町に行って』

岡田和人 福島聖ステパノ教会

このプログラムに参加することになったのは出発ぎりぎりでした。参加の誘いをいただいたのは8月はじめのことで、既に夏休みの予定は決まっていた「だめだな」と思っていました。他のキャンプに参加できなくなり、仕事も予想以上に早く終わり高島のほうから手招きされているようでした。

初日は博多で一泊し、次の日は長崎の原爆資料館などを見学しました。私のほかは中学3年生の長男と小学6年生の長女、1年生の次男の3人で行きましたが、もし東京電力福島第一原子力発電所の事故が最悪の状況になっていたら、原爆を投下された当時の長崎と変わらないような悲惨な状況になっていたかもしれないとみんなで思いました。

3日目は高島の海水浴場でみんなでスノーケルを着けてさんご礁を見ました。浜辺からすぐ近くで見ることができてびっくりしました。子どもたちも福島ではなかなか海水浴も出来ないけどここでは、みんな本当に楽しく遊んでいました。

福島では町の公園でも子どもたちの遊ぶ姿はほとんど見ることが出来ません。幼稚園生や小学校低学年の子どもたちは特に砂遊びがしたい年頃ですが今はまったく出来ません。高島の砂浜で遊んだ記憶がずっと続くと思います。今回高島に行くことが出来てほんとに良かったです。また何回でも行きたくなる場所でした。きれいな海ときれいな空気、そして放射能のストレスからの解放を今も昨日のように思い出します。

「南の島で夏休み」プログラムは、長崎県高島にある九州教区信徒の民宿を使って、岩手、宮城、特に福島で暮らす家族に思いっきり夏休みをすごしてもらおうと呼びかけたものです。九州教区信徒有志の手伝いをいただきながら、福島から一家族4名を迎えて、碧い海に囲まれた静かな島で3泊4日を過ごす事が出来ました。九州から、今回の出会いをきっかけにこれからもこのようなプログラムをやりたいという声があがっています。



みんな  
で釣  
りへ



またね、南の島!

夏休み子どもプログラム②

# 福島・山古志 ジョイントキャンプ

7月26日-28日

2004年10月の新潟県中越地震を機に、日本聖公会中部教区では「被災者支援オープン・スペース」を立ち上げ、中越地方に位置する山古志村（当時）を中心に支援活動を開始しました。その活動の一つに、子どもたちを対象にしたキャンプがあり、現在まで毎年続けられています。

今年は「プロジェクト」とのジョイント・キャンプとして、山古志と福島から24名の子どもたちが山古志の「あまやちキャンプ場」に集まり、バーベキューをしたりプールに行ったり、キャンプファイアをしたりと、盛りだくさんのプログラムを楽しみました。帰る頃には「来年は福島に山古志のお友だちを呼びたい！」というほどみんな仲良くなり、大盛り上がりのキャンプになりました。今後もこのような交流キャンプが継続できたらと、願っています。



6時半から  
ラジオ体操



長岡聖ルカ教会前で  
集合写真

中部教区の渋澤主教も  
きてくれました!



なかなか割れない  
スイカ割り



また会おうね!!



渋澤主教からの  
プレゼントの花火

みんなで鳴らす  
“希望の鐘”

夏休み子どもプログラム③

# 行ってみよう！ ムロネーランド

7月23日-25日

好きな絵をかいた  
Tシャツ



ムロネーランドについて、  
いっぱい友達を作りました。  
あと初めて馬にのったので、  
うれしかったです。



みなこ

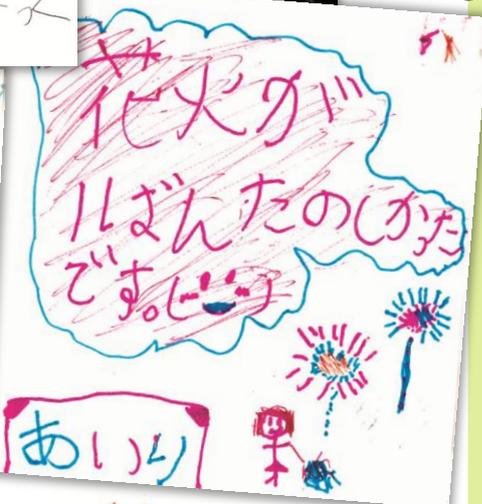


馬の  
“めいちゃん”  
にのったよ!

キャンプの思い出  
初めてのキャンプ！いっぱい  
友達がイキイ、バーベキューなど...  
楽しい思い出が出来ました。  
キャンプに行ってよかったです。  
友達いっぱい  
みんな仲よし



ごはんは  
みんなで  
作りました



にやー  
教会の近所のネコ



あいちゃん



これまでに外国人支援を通して出会った子どもたちとその友だちを対象に、室根聖ナタナエル教会を宿泊場所にキャンプを行いました。教会周辺を「ディズニーランド」ならぬ「ムロネーランド」と名付け、昼は乗馬体験、夜は田んぼのまわりでホテルを見つけるなど、心から楽しみました。参加者は、宮城県多賀城市、東松島市、石巻市、南三陸町から集まった幼稚園年長児から小学校5年生までの7名と近所に住む飛び入り参加の子どもたちです。

子どもたちの母親はみなフィリピン人で、「異国での被災」という特異な体験をした人たちです。被災直後は、言葉の壁や、文化、習慣の違いからとても辛い体験をしました。それでも、懸命に子育てをしながら地域の一員として生活しています。このキャンプは、財政的な問題も含め、さまざまな事情で自分の子どもを遠くに連れて行けないお母さんたちに対する、応援のキャンプでもあります。

## 「被災地に身を置くことから始めよう」報告

8月27日(月)～30日(木)、青葉静修館に宿泊させて頂き、学生15名とスタッフ5名が被災地訪問とボランティア活動を行いました。「いっしょに歩こう!プロジェクト」には、企画段階から、名取市の箱塚桜仮設住宅を紹介して頂くなど、大変お世話になり、お蔭様でとても有意義な体験と交流の場を与えて頂きました。以下、学生の感想を報告させて頂きます。(チャブレン 司祭 小南 晃)

### 初日：大川小学校～女川町～石巻市街訪問

庄野 紗弥 (ファッション・ハウジングデザイン学科 2年)

海岸沿いを訪問し、私は唖然としました。大川小学校では、周囲に散らばる無数の瓦礫、そして変わり果てた校舎を見て鳥肌が立ちました。被害の大きさなどを分かっていたつもりになっていたに過ぎなかったと、目の当たりにして感じさせられました。今回学んだことを活かし、私は将来、街の復興や、地震や津波による被害を抑える街造りに関わる仕事に就きたいと、さらに強く思いました。

吉田 汐織 (生活学科 3年)

大川小学校を訪れた。付近に子どもサイズの靴底が落ちているのを目にし、とても心が痛んだ。また津波が到達した高さに印が立てられていて、その場所が学校からあまり離れておらず、少しの判断の違いで被災状況が大きく変わってしまうことを改めて感じた。津波火災で校舎が燃えた門脇小学校では、焼け跡から被害の大きさを感じた。学校の付近にはお皿や靴、レンジなどが流されてきていて、その光景を自分の目で直接見て、現状をより身近に認識できた。

### 2日目：箱塚桜仮設住宅でのお茶会と訪問

辰濃 菜穂 (生活学科 1年)

お茶会で2人の方とお話しし、仲良くなった方のお宅を訪問することが出来ました。キッチンの掃除が大変だと話されていたため、その周辺の掃除をしながら、他愛のないお話をしました。私自身とても楽しく、時に色々と考えるきっかけを頂くことができました。この出会いで終わるのではなく、これからの自分の生き方に活かしていきたいと思います。

金谷 紗貴 (生活学科 3年)

今回の仮設訪問は、今まで報道でしか触れることのなかった震災の影響や被災地の現状を、当事者意識を持って考える上で、非常に有意義な時間であった。暮らし易いとは決して言えない環境にあって、それでもまた地元を盛り上げようと立ち上がった人

たち、歌って笑って明るく振る舞うおばあちゃんたち、そして未来を生きる子どもたちがいた。それぞれの想いは違うかも知れないが、復興と言う一つの大きな目標に向かっていく姿が見られた。被害の大きさを改めて実感し、今一度、自分自身が被災地の復興にどのように貢献できるのかを考えて行きたい。



大脇自治会長から家庭訪問のための指導を受ける。

### 3日目：講話と対話、除草作業、閑上地区訪問

丸金 千紘 (子ども発達学科 2年)

「何にも無くなってしまった」。私が一番印象に残っている言葉です。これは震災後、住民の方々が初めて閑上地区を見た際に呟いた言葉だそうです。この言葉を聞いて、頭を殴られたように感じました。地図や映像ではただの点の一つであった家も、実際には何人もの思い出や生活が詰まったものであったこと。それが全部無くなったということを感じ、愕然としました。改めて現地と自分自身との温度差を思い、それを忘れてはいけないと思いました。

高橋 枝里 (心理学科 2年)

東日本大震災について報道されていた様子を実際にこの目で見て、津波がどれほどの高さで来たのか、海水を被って稲を育てることが出来ない田、1年以上経っても続いている瓦礫処理などから、生き延びた方々、お亡くなりになった方々の当時の様子が思い浮かび、胸が痛くなりました。今回、ボランティアに参加して、まずすべきことは現状を伝えることだと思います。今回撮った写真と共に、人々に伝えて行きたいと思います。

# 東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加して

柳城短期大学講師：水落洋志

8月30日（木）～9月2日（日）



「被災者支援センターしんち」前にて

ふじ幼稚園、まちの工房「まどか」、「被災者支援センターしんち」等を訪問し、園長先生、施設長、「しんち」に常駐して支援活動をしている松本さんのお話を聞き、参加者はそれぞれ様々なことを心の中で感じ、また、自分を見つめなおすことができました。

以下は参加者の感想の抜粋です。



- 「これから先、しっかりと保育者として学び、どんなことがあろうとも子どもたちの命を守らなければという思いが生まれた。」
- 「自分の中で、今回活動したことを振り返り、その思いをしっかりと整理して今回だけで終わらせず、このような活動を続けていきたいと思う。」
- 「がれきの山は、がれきの山と考えるのではなく、被災して亡くなった人たちの大切な宝物と思う。」
- 「被災者の方々と触れ合う中で、被災者が、ただ悲しみにくれているだけでなく明日に向かって、皆が同じく前を向き、生きていこうとしている姿から、人と人のつながりの大切さを知りました。」
- 「私たちにできることは、震災復興がまだ終わ

っていないことを周りの人へ伝え心に強くとめ、自分が置かれている生活に感謝して生活していきたい。」

- 「今、自分が見た光景を絶対に忘れないように目に焼きつけておきたい。自分で今回体験したことを考え、人生の課題にしていこうと思います。」
- 「子どもと日常生活を過ごすだけでなく、子どもの命を第一として行動できるようになりたいと思う。そして、人の気持ちを感じ、それに答えられる人間になりたいと思う。」
- 「実際に現場を目にしたり、生の声を聞いて、わかったこともあるし、感じたことがあって、今、復興に向けて必死に頑張っていることがひしひしと伝わってきた。この経験を通して、いろいろと考えることができた。」



ふじ幼稚園の子どもたちと



最後に、この地震で亡くなった方々とそのご家族、ご友人に神様の慈しみとお恵みがありますようにお祈りいたします。また、一日も早く被災地が復興し、人々に明るい笑顔が戻りますよう、心からお祈りしています。

## ■南三陸町（宮城県）／手作りプログラム

サンパギータ・ファイティング・レイディーズ(SFL)\*の面々が、定期的に集まってエコバッグやポシエットなどを仙台基督教会の信徒の方々に作品のヒントを貰いながら一緒に作っています。介護ヘルパー2級資格を取った後も、みんなで集まる「場」が欲しいと企画されたものです。日本語学習を継続する「場」としての役割もありますが、すぐに母語のタガログ語でおしゃべりが始まってしまいます。また、制作したものは販売をして SFL 活動費に充てる予定です。しかし自作のものはどうしても手放すことができず、自分の宝ものとしてしまい込んでしまいます。当初の目的はさておき、みんなが大笑いをしながら縫い物をしている姿に、「なんでもあり！」の心境になります。



\*志津川に暮らすフィリピン人女性の会の名称

## ■石巻市、多賀城市（宮城県）／学習支援

カリタス石巻ベースの一室を借りて、お母さんが外国人の子どもたちとその友達を対象に、みんなで夏休みの宿題に取り組みました。言葉の問題からお母さんに見てもらえない宿題も、気楽に教えてもらえるボランティアのお兄さん、お姉さんがそばにいることではかどりました。また、友達と一緒に取り組むことでやる気も増し、楽しく宿題を終わらせることができました。高校受験を控えた中学生のお宅も定期的に訪れ、日本の受験システムや地元の高校事情などを伝えながら勉強をしています。



## ■いわき市（福島県）／平七夕祭りに出展

大熊町（渡辺町昼野仮設住宅）や富岡町（泉玉露仮設住宅）の方々は共に暑い夏を乗り越えました。その中で、夢中になって取り組んだのはお世話になっている地元いわき市の「平の七夕祭り」に協力して、七夕飾りの制作をしたことでした。社会福祉協議会の方の指導を受けながら、制作に励みました。そして平の目抜き通りに飾られた作品は特別賞に輝きました！



## 英国聖公会ウーリッチ教区 マイケル・イプグレイブ主教 来訪



比叡山宗教サミットに出席されたあと、8月6日～8日に仙台、釜石、盛岡を中心に被災地を訪問されました。8月6日には、盛岡聖公会で広島原爆記念のキャンドル・ナイトに、そして8月8日には釜石神愛幼児学園のお誕生会に参加され、それぞれ短いメッセージを下さいました。以下は、キャンドル・ナイトで話されたメッセージの要約です。

毎年8月6日を迎えると、私は2つのことを思いとても複雑な気持ちになります。1つは、1945年8月6日に広島に原子爆弾が投下され、(旧)日本軍の捕虜としてタイで強制労働をさせられていた父が生還できたことです。原子爆弾の投下によって※戦争の終結が早まった可能性があるからです。あれ以上戦争が長引いていれば生還は難しかった、つまり私は生まれて来なかったということです。(※このことについては様々な議論があるところです。／編者)

もう1つは、この日は「主イエス変容の日」であるということです。この日は、イエス・キリストが神さまの子として、神さまから誉れと栄光を受けられたことを表わした日であり、私たちに対しては希望と平和の福音を宣言する日でもあります。

原爆の投下を戦争終結のための「正当な行為」と位置づける人たちが少なからずいます。しかしながら、父と私の個人史がどうあれ、原爆の投下は決して正当化できるものではありません。また、神さまの示される希望や平和は、人の死や破壊に基づくものではないと確信をしています。

戦争や内戦がなくなることのないこの世界にあって、私たちはどのような平和への道を選び取るのか、常に選択を迫られながら生きているのだと思います。

### 仮設支援

- 俳句を楽しむ会／釜石市（大畑東仮設・松倉仮設）
- お料理会／釜石市（野田町仮設）
- 体操プログラム／釜石市（上中島仮設）
- ▲買い物バスツアー／名取市（箱塚桜団地）

#### ◆ほっとコーナー／新地町

8月24日、ついに「ほっとコーナー」が開店しました。このコーナーで中心となつてご奉仕くださるのが、作



田仮設にお住まいの被災された女性です。彼女の明るい笑顔とおしゃべりが煎り立てのコーヒーをなお一層おいしくしてくれています。そのお仲間が集まって笑い声が絶えません。「被災者支援センターしんち」はもはや地元の皆さんのものになっています。【開店日：毎週水曜日 10時～17時、毎月第1日曜日 13時～17時】

#### ◆ほっこりカフェ

／いわき市（泉玉露仮設・渡辺町屋野仮設）

#### ◆さくらさかすゾウ制作／いわき市（泉玉露仮設）

その他にも…戸別訪問（小白浜仮設、唐船町大曾根仮設、甲子仮設 他）、ひまわりのクッキー・手作りうちわ配布、パッチワーク教室、座布団配布、談話室プログラム、七夕まつり出展、子どもプログラム開催 など

### 外国人支援

- ★個別支援／大船渡市、石巻市、多賀城市
- ▲英会話教室開講手伝い／名取市
- ▲手作りプログラム／南三陸町
- ▲夏休み宿題お手伝いプログラム／石巻市
- ▲ホームヘルパー 2級資格取得講座／気仙沼市

### 障がい者支援

- ▲買い上げ支援／仙台市（まどか）、気仙沼市（ひまわり）
- ▲施設訪問／仙台市（まどか）、気仙沼市（ひまわり）

### その他

- ▲青葉静修館リフレッシュプログラム／仙台市
- ★リフレッシュプログラム「南の島で夏休み」／長崎県
- ★英国聖公会ウーリッチ教区マイケル・イブグレイブ主教被災地訪問／岩手、宮城県各所
- ★幼稚園教諭リフレッシュプログラム／湯布院など

### ★学生ボランティアによる仮設住宅、幼稚園などでの奉仕活動／岩手、宮城、福島各所

夏休みに多くの学生がボランティアに参加しました。

釜石を訪れた女子聖学院の学生たちは、事前に練習し



てきた歌や踊りを仮設住宅の談話室プログラムで披露し、住民の方々もいっしょに遊戯を楽しみました。

### ★日本聖公会全国青年大会 2012／宮城、福島県各所

8月23～26日、仙台にて開催。日本聖公会、大韓聖公会の青年約80名が集まり、被災地を憶えて学び、分かち合い、祈りの時を持ちました。実際に自分の足で被災地に立つてみることで、震災を改めて自分たちの問題として捉えることができた様子でした。プロジェクトも協力として携わり、青年たちの活動をサポートしてきました。

- 岩手県 ▲宮城県 ◆福島県 ★その他、複数県

における活動を示します。

紙面の都合上、掲載されていない活動もあります。

詳細は各ベースのブログをご覧ください。

ホームページ：<http://www.nskk.org/walk/>

### コラム ▶ あの日あの時、この人と。

#### ④ひかりが灯る

「わたしも知らない風景なんです」。宮城県石巻市で生まれ育ったはずの女性が、石巻を訪れた私たちにこう仰いました。『re:member～ひかりを灯そう～』をテーマに掲げた今回の全国青年大会。プログラムの1つ『被災地巡り』では、それぞれの被災地を地元の方に案内していただきました。その女性にとって、津波の被害にあった街の姿は彼女の知る石巻ではなかったのです。彼女は自分の故郷の風景を見ても懐かしさを感じる事ができず、こう仰ったのではないのでしょうか。当然、同じ場所に同じ建物が建てられたとしても、その女性にとっての故郷は戻ってきません。それでも、「元の場所で以前と同じ店が再開することは嬉しい」と彼女は言い、津波被害により家々のあかりが失われ真っ暗となった街に、店や住居が復活することを「ひかりが灯る」と表現されていました。(2012年8月全国青年大会参加者[東京教区])



いっしょに歩こう！プロジェクトニュースレター第14号 2012年10月1日発行

「いっしょに歩こう！プロジェクト」事務局 OPEN 月～金 10:00～17:00 CLOSE 土・日・祝

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町3-4-5 クライスビル 2F TEL:022-265-5221 FAX:022-748-5321

E-mail: walk@nskk.org ホームページ: <http://www.nskk.org/walk/>